

桐蔭横浜大学ミディエーション交渉研究所

公開研究会のご案内

この度、桐蔭横浜大学ミディエーション交渉研究所において、下記の要領にて、公開研究会を開催することとなりましたので、ご案内申し上げます。ふるってご参加下さいますよう、お願い申し上げます。

記

日 時： 2015年3月21日（土）13時30分～17時00分

受 付： 当日12時30分より受付を始めます。

場 所： 桐蔭法科大学院（横浜キャンパス）L302 教室

〒225-8502 横浜市青葉区鉄町1614番地

参加費： 無料（会場・資料の準備の都合がございますので、お手数ですが、末尾の要領にてお申し込みのメールいただけましたら幸いです。）

◆プログラム概要：

（1）開会（13：30～13：40）

（2）個別報告（13：40～15：40）

13：40～14：40

竹田 純一 氏（東京農業大学農山村支援センター事務局長、中央大学理工学部非常勤講師、（一社）環境パートナーシップ会議理事、（株）森里川海生業研究所所長、内閣官房地域活性化伝道師）

テーマ：公共事業や地域づくりの現場における合意形成の実践とミディエーション
（概要は次ページをご覧ください。）

14：40～15：40

北村 隆憲 氏（東海大学法学部教授）

テーマ：ミディエーションの相互行為分析（概要は次ページをご覧ください。）

休憩（15：40～15：55）

（3）ディスカッション（15：55～16：55）

（4）閉会（16：55～17：00）

◆申込方法：

参加ご希望の方は、下記事項をご記入のうえ、3月15日（日曜）までにミディエーション交渉研究所宛にメールにて（medinego@toin.ac.jp）お申込みいただきますようお願い申し上げます。

●ご芳名及び振り仮名

●ご所属及び役職

ご不明の点などございましたら、ミディエーション交渉研究所までメールにてお問い合わせください。

桐蔭法科大学院・横浜キャンパスへのアクセスは（<http://toin.ac.jp/lawschool/access-top/ycampus/>）
をご覧ください。

第1 報告

竹田純一氏

(テーマ) 公共事業や地域づくりの現場における合意形成の実践とミディエーション

(概要) トキの野生復帰をはじめとする野生生物・自然環境の復元の現場では、さまざまな合意形成が必要です。一方、環境破壊を招く恐れのある開発行為の現場でも同様にさまざまな環境配慮と多様な主体との合意形成が必要です。私は特に前者の自然共生型地域づくりを天職と感じているため、公共事業や地域づくりの現場での構想段階からの合意形成とファシリテーションの方法論を紹介することで、ミディエーションとの相関関係を本研究会では考察したいと思います。自然環境に変化をもたらす自然復元から開発行為まで、事業実施の段階は、大きく4段階に分かれます。構想、計画、実施(設計施工)、運営・維持管理です。各段階で必要な合意形成がはかられていれば、事業は円滑に進展しますが、不十分な場合や省かれている場合には、実施段階や運営段階で不備が顕在化するケースが多々見受けられます。私が提唱する合意形成の最初のポイントは、対象範囲と対象者の設定です。

構想：鳥瞰的な視点、流域等の遠景を対象に、専門家、住民、団体、自治体等多様な主体を含めた意見や知見の収集

計画：対象地域を明確化した中景を対象に、利害関係者を含め課題抽出

実施：事業現場を対象とする近景を対象に、地域住民、長老等の現場の意見聴取

運営：遠景的視野で近景を対象に、住民、学校、団体、企業、自治体での運営

合意形成の手法は、段階毎に異なりますが、対象者全員による全体像、異なる意見の把握と相互理解の促進は、いずれにも共通する事項です。この合意形成を導くファシリテーションの方法は、いくつかの地域調査手法と問題解決技法を組み合わせで行いますが、関係者全員の理解を促進させるために、地図、写真、カードを用いた具体的でわかりやすい方法論が合意形成を促進させます。具体例として、開発とトキの野生復帰、多目的ダム計画と希少種保全、高速道路と里山整備計画などを事例として、行政と住民、利害関係者、環境専門家等を交えた事例紹介を行います。

第2 報告

北村 隆憲 氏

(テーマ) ミディエーションの相互行為分析

(概要) 相互行為分析(interaction analysis)は、社会学の中から生まれて発展した「エスノメソドロジー(ethnomethodology)」と「会話分析(conversation analysis)」という考え方によって、実際のコミュニケーションのやりとり(相互行為)を分析するアプローチです。会話の流れは瞬時に展開していきませんが、こうしたアプローチは、その録画と詳細な書き起こしを分析することによって、いわばリバースエンジニアリングのように、やりとりの展開と帰結を、文脈の中で会話参加者たちの視点から系統的・詳細に解析して、そのコミュニケーションのメカニズムを解明します。本報告では、(1) 会話分析のいくつかの関連する概念を紹介した上で、(2) それらの概念を使いながら、会話分析の視点から、対話促進や問題解決という可能性がミディエーションによって原理的にいかにして可能となるのかについて検討し、(3) そうした観点から、実際にいくつかの(模擬) ミディエーション・データを分析することによって、(4) 例えば、「傾聴」などの重要な活動が実際にどのように行為者によって達成され(あるいは失敗し)、そこから実際にどのようなコミュニケーション上の帰結が生じるのか、といったことを可視化する試みを行ってみます。こうした知見は反省的実践家としてのミディエータの訓練に活かす可能性があると考えられます。